俺と少女の一日

へべれけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と少女の一日

【Ｎコード】
Ｎ２３４２ＢＡ

【作者名】
へべれけ

【あらすじ】
妹が友達と旅行に行くからという名目で、明日まで妹の娘である亜紀の面倒を見ることになってしまった。
なんということだ。
自分の大事な休日がつぶれてしまう。
・・・などという不満を口に出すことはしない。
自分が大人だからだ。
というわけでそんな大人の自分が、ちょっとおかしな一面を持つ亜紀とのんびりと過ごすちょっぴり不思議なお話。

寝起き（前書き）

アホな主人公ですが、生温かい目で見守ってくださるとうれしいです

寝起き

休日というのはいいものだ。
仕事という嫌な出来事から逃避することができる。
その逃避するための行動の一つに睡眠をするというものがある。
これは、いつもは朝7時起きなのを休日は朝11時起きにするということによって現実から逃げる時間を増やすというメリットがあるのだ。
しかし今日はそれを妨害するものが自分の上に乗っていた。
「しゅういちー起きろ―！」
そう言うパジャマ姿の彼女の名前は扇原亜紀という。
いつもは一人暮らしな俺の部屋になぜこいつがいるのかというと、妹が旅行に行くからという名目で俺に預けてきたからだ。
であるため、自分は妹が地元へ帰ってくる明日までこいつの面倒を見なければいけないのだ。
「うぐぐ・・・あと五分」
しかしこいつは朝からうるさいな。
全く俺の睡眠を邪魔するなんて、後がどうなっても知らんぞ。
といってもまだ六歳の子どもだからか、布団の上から乗られても心地よい圧迫感を感じることができる。
「はーやーくー」
亜紀は布団の上で上下運動を繰り返し続ける。
「おほっこれはいいマッサージだなあ・・・」
自分はまどろみつつそんな事を呟いた。
・・・しかしうるさい奴だ。
いくら妹の子どもとはいえ、俺の休日の貴重な睡眠を邪魔した罪は大きい。
これは罰を与えるべきだ。
そう、対象がたとえ子供だとしても。

むしろ子供には今後のためにきついお灸を据えてやるべきなのだ。
だから。

二度とこんな事をしないようにびっくりさせてやろう。
そう思い自分は布団を被ったまま立ち上がった。
「うおっー！」
すると、亜紀が日本昔話にでてくるおむすびのようにすってんころりんと後転した。
そして顔を俺の方へと向け、状況を掴めないのか不思議そうな顔をしてくる。
「・・・」
子供の目はすごく純粋だ。
であるがゆえに、上が布団、下がトランクス姿の自分を見られていると思うとゾクゾクしてくる。
この2人の状況を隣人が見たらすかさず通報され、自分は今後の人生の大半を冷たい飯を食べて過ごすことになるだろう。
「えっ・・・？なに？しゅういち、どうかしたの？」
まだ頭の中が整理されていない呆けた様子で聞いてくる、妹の娘の亜紀。
その目からは少しだけわくわくを含んでいるように感じた。
「いいや、俺は週一ではないぞ」
亜紀の顔を見たからか、何故だかノリでそんなことを答えてしまう。
「えっじゃあ誰なの？」
しかも亜紀は俺のこのノリに完璧に喰いついてきてしまう。
そう、まるで餌に食いつく魚のように。
我ながらうまい表現だ。
だがこのリアクションは何だ？
今の子どもはもっとクールなイメージだったのに。
上半身布団、下半身トランクスの変態を見た瞬間に冷めた目付きで

嘲笑されると思っていたのに。
・・・決して、嘲笑されることが嬉しいドＭのわけではない。
ただびっくりしたからそう思っただけだ。
この亜紀のリアクションは自分からしたらとても嬉しい。
だけど驚かせた時点で、「怖がらせてごめんね、さあ朝ごはんでも食べようか」と紳士的にふるまう予定が狂ってしまった。
完璧にミスった。
これからどうすれば！？
まさか最近亜紀が熱心に見ているゴウカイジャーなどというヒーロー番組の怪物君になるべきなのか？
「わああ・・・」
亜紀がまるでワクワクさんがおもちゃを作っているのを見つめているゴロリのような目でこちらを見てくる。
全然引いてないよ、この子。
この時に、自分の中に一つの使命感が湧いた。
これは、やるしかない。
ワクワクしている子供を楽しませてやるのは大人の義務ではないのか？
そうだ。
子供に夢とワクワクを与えられなくて何が大人だ（現在２５歳）。
よおし、やってやろうじゃないか怪物に成りきってエンターテイナーになりきってやろうじゃないか。
そしてこの子にとってのワクワクさんに。
常に子どもたちにわくわくを提供してくれるワクワクさんのように。
なってやろうじゃないか。

ワクワク

ごほん。
咳払いをする。
大丈夫。昨日カラオケに行ったけど声帯の調子はいい。
大丈夫、大丈夫だ。
なぜか自分は朝のよく分からないテンションのおかげでポジティブであった。
「全く・・・我を知らぬとは愚かな娘だ・・・何故私の名を知らぬというのだ・・・」
完璧だなりきっているぞ、自分。
「ごめんなさい・・・」
俺（怪物）の言葉に対して素直に謝ってくる。
これは演じがいがあるぞ。
「布団パンツマンだ！」
突然亜紀が自分を指さしそう言ってくる。
全く・・・私がそんな下世話な名前のはずがなかろうに。
「お前の答えは全く違う。私はパンツと布団を逆に装着してしまったおばかさんではない」
すると亜紀はそうかあ・・・と少しため息をついた。
全くこの娘は・・・
「もしかして知りたいというのか。我の名を」
すると亜紀は顔を上げぶんぶんと首を縦に振ってくる。
「仕方ない。ならば特別に教えてやろう」
敷布団を被った状態で両手を天へとかざす。
「私は人に安眠と防眠を与えるまどろみの怪物。いずれこの世界をこの力で征服する者だ
そして更に、私の名を知った者は永遠の眠りへと誘われるのだ。それでも知りたいか人の子よ」

俺のその言葉に亜紀は真剣な表情でうなずく。
「そうか、そこまでの覚悟があるのなら教えてやろう。私は眠を司る者、人呼んで！」
バッと両手を天（蛍光灯）へと掲げる。
「その名は！」
そう言いかけた時、片方の壁からドンドンと叩く音が聞こえてきた。
全く、うるさい隣人どもだ・・・
これでは紹介シーンが台無しではないか。
壁を叩く音が消えるまで俺は手を一旦下げる。疲れた。
ドンドンと叩く音が続く。
が、自分は消えるまで待ち続ける。
そう、まるでかの有名な忠犬ハチ公のように。
ぴたりと音が止んだ。
そしてそのタイミングで俺は一旦下げた両手を再び天へと掲げる。
「我の名はー！」
そう言いかけた時、インターホンが鳴った。
・・・全く、うるさい愚民共だ・・・
「おい、そこの小娘」
正座してこちらを見つめている小娘を見て言う。
「ちょっとそこで待っていろ行儀よくな」
すると小娘は我の言葉に対して縛られたように動かなくなった。
ふっふっふ・・・かわいいものよのう・・・
我は布団をかぶりながら部屋を出て行った。
そして廊下に出た途端に被っていた布団を投げ捨てるように置く。
何故このような置き方をしたのか。
簡潔に言うと、怒っているからだ。
なぜ怒っているのかというと子供との怪物ごっこを妨害され、せっかくのいいところ台無しにされたからだ。
怪物に成りきっていた自分が突然現実に戻らされ、俺は何をやっているんだという自己嫌悪に陥らされたこと。

我は先ほどのインターホンと壁ドンに対して強烈な怒りを覚えていたのだ。
ドアの前まで辿りついた。
さあて、なんて言ってやろうか。
そんな意気込みでドアを開ける。
その瞬間。
自分の背筋が凍るのが感じられた。
なぜならば。
自分の目の前にいるセミロングの髪の毛の女性は、自分が密かに片思いをしている隣人だったからだ。

豆腐のハート

しまった、この人がお隣さんであることを忘れていたではないか。
自分の目の前に不機嫌そうな顔をして立っている女性に対してそんなことを思う。
「あのお、もう少し静かにしてもらえませんか」
女性は静かな声で言ってくる。
その言葉には怒りが込められているのが感じられた。
その様子に自分は思わずたじたじになる。
「いやあ・・・子供を喜ばすために・・・」
「そんな事関係ないです」
ぴしゃりと言い切られる。
その瞬間、自分の豆腐のように脆いメンタルがボロボロと崩れ去っていく、そんな気がした。
「わたしは今朝帰ってきたばっかりですごく眠いんです。それをさっきのアホみたいな芝居に妨害されて、すごく迷惑です」
俺が
俺がワクワクさんみたいなわくわくを届けるように考えた芝居。
それをアホみたいという一言で切り捨てられて自分は思わず泣きそうになる。
「でも・・・」
「でもじゃない！ちょっとそこに座れ！」
怒っていた。まるでその顔はまるで般若のようだ。
自分が片思いしていた女性に説教される情けなさとこんな怖い一面を見てしまったショックで。
自分は自我を保つので精いっぱいになっていた。
「はい・・・」
自分はうなだれて風にでもかき消されそうな声を出す。
怖い。その感情が俺の中を全て支配する。

俺が見上げると女性はハアッと呆れたようなため息をついて
「まあその情けない涙目の顔を見る限り、反省が見られるのでいいです。ただ今後朝にあのようにわめくようなことはやめて下さい」
「はい・・・ずみまぜんでじだ・・・」
もう俺は怪物の面影などなかった。
豆腐のようにボロボロと俺の心は完全に崩れ去っていた。
「では」
女性がハーブのようなフローラルな香りをこちらに漂わせて踵を返そうとする。
しかし、立ち止まった。
「あと一つ、言い残すこと忘れてました」
まだ何かあるのか。
俺は今、豆腐のように崩れたメンタルの欠片を集めようとして立ち直ろうとしているところなのに。
「なんでしょうか・・・」
すると女性はこっちを見下すような表情をして
「あの怪物の謳い文句は・・・少し考え直した方がいいですよ」
ぷふっと吹き出すように笑って女性は部屋へと戻っていった。
その瞬間。
俺が集めようとしていたメンタルの欠片が完全に消滅させられたような、そんな気がした。

人として

何なのだろう。
この、何かを失った喪失感は。
あ、分かった。
人としての尊厳を失ったんだ。
パンツ一丁で好きな人の前で泣きながら謝罪して。
恥かいて。
何なのだろう、俺って。
「はあ・・・」
休日の清々しい朝には似合わないため息をつく。
とりあえずご飯を用意しよう。
そう思い、部屋にいる亜紀を呼びに行こうとする。
廊下を歩いている時、先ほど俺(アホ)が投げ捨てるようにした敷き布団がくたびれたように置いてあった。
それを見て、自分は何だか虚しい気持ちになる。

干そう。

そうだ。晴れている日に干されているのが布団というものじゃないか。
あんなもの・・・頭に被るものじゃない。
自分は布団を拾い上げ、寝室の外にあるベランダへと歩いて行く。
ドアを開けると正座している亜紀がそこにいた。
「あれ？しゅういち。もう怪物ごっこはやめなの？」
「うん・・・俺もう大人だからね・・・」

俺がそう言うと、亜紀は「もうしないの？」と少し残念そうな顔をして言ってきた。
許してくれ亜紀。
俺だって自分がかわいいんだ。
子供の夢を守るか、自分の人としての尊厳を守るかどちらかにするか聞かれたら後者を選ぶ奴なんだ。
「うん、周りの人に迷惑だったらしいから・・・」
「え、そうなんだ・・・じゃあしゅういちはあの怪人にはもうならないの？」
「うん・・・隣にも怪人が居たからね・・・」
「えー・・・」
亜紀は心底がっかりした様子であった。
だが、分かってくれ。これも自分が人でいるために必要なことなんだ。
「ほらほら、顔洗ってご飯食べるぞ」
「はーい」
そう言って亜紀は立ち上がり、リビングの方へと向かって行った。
しかし、あんなにがっかりされるとは。
予想以上に好奇心が旺盛なことに気づき自分は少しびっくりしていた。
「あんな子だったっけな・・・？」
前見た時は、確か半年程前だったけどその時はそこまでリアクションも大きくなかったし・・・

まさか・・・

あいつ、俺に気を遣うという大人の対応をしていたというのか・・・
ネガティブな考えが自分を支配する。
それにつれてどんどんと自分の気持ちが落ち込んでいくのが分かる。
・・・駄目だ駄目だ、ネガティブになるな自分。

嘲笑されなかっただけマシだと思おうじゃないか。
そうだ、あんな糞みたいな演技で嘲笑するどころかノッてくれたんだ。
自分は幸せ者なのだ。

・・・よーし、何か前向きになってきたぞ。

物干し竿に布団を掛ける。
そして自分は亜紀の待つリビングの方へと向かって行った。

朝ご飯

パクパクモグモグ

そんな擬音だけが聞こえてきそうな静かな朝ごはんだった。
さっきは活発だった亜紀も、ご飯を食べている時は静かだ。
どうやら、妹にしっかりしつけられているらしい。

食べている時に喋るのは行儀悪いからもうちょっと静かにね

そんなにきつくない言い方で注意されたらしい。
普通は母親にこんな注意されても、亜紀ぐらいの年齢だったら何回言われても直そうとしないだろう。
だが、この子は一回の注意だけで黙々と食べるようになったらしい。
そのことを妹から聞いた時はあんまり気にしなかったのだが、いざ対面してみると亜紀ぐらいの歳の子が喋らないのは結構違和感があるものだ。

「・・・・」

「・・・・」

2人で食べている時に無言時間が続くのは、結構きついもんがあると改めて実感した。

「なあ、亜紀。眠いのか？」

「えっ？大丈夫だよ？」

・・・・

話が続かない。
自分にこいつを楽しませるスキルがあるといいのだが、いかんせん俺は会話するのが下手だし趣味も子供にとっては退屈でしかない釣りしかない。
今日、亜紀とどのように過ごせばいいのだろうか。

妹に任された上には楽しませてやらねばならないと思うんだけれども。
・・・何をすれば喜んでくれるのか分からない。
ちなみにさっき変な怪人を演じたら喜んでくれたが、あれはノーカウントだ。
「むぐぐ・・・」
分からん。
小さい女の子と少年の心を持った大の大人である俺は何をしてやればいいんだ。
おままごと？それともあやとり？いやいやそんな事しても今時の子どもは喜ばないだろ。
仕方ない。
聞いてみるか。
「なあ、亜紀」
自分が悩んだ末に話しかけた瞬間。
「ぷふっ・・・」
と亜紀がご飯を吹き出しそうに笑った。
そしてちらっと俺の顔を見てくる。
何で俺が声を掛けた瞬間に・・・
少しだけ気分が悪いぞ。
「何で笑ったの？」
「ごめんな・・・さい・・・ぷふ・・・しゅういちの顔が・・・お、面白かったから・・・」
最後の方は声が笑っていて、ほとんど言葉を聞きとることができなかった。
「そんなに面白かったの？」
「ぷふっ・・・ごめ・・・ぷふっ・・・」
・・・そんなに俺の顔って面白いのか。
良く分からん。

「まあいいか」
俺はそう言い、ご飯がなくなったお椀と味噌汁のお椀を手に台所へと向かって行こうとした。
すると、
「しゅういち、ご飯食べ終わった後ごちそうさましなきゃだめなんだよ」
と言われた。
「えーめんどくさい」
「ごちそうさましないとお母さんに怒られるんだよ？」
「あーなるほどな」
妹は怒ると怖い。
そのことが娘である亜紀に無意識に染みついているのだろう。
確かに、あいつはきちっとしてるからな。
心の中で俺はそう納得した。
「分かったよ」
俺はお椀を持ち、席に戻る。
「そんじゃ御馳走様でした」
「ごちそうさまでした」
2人で手を会わせてご飯終了の合図をする。
なんだか俺がしつけられているみたいだな、と心の中で思った。

トラウマ

亜紀は食後、自分の部屋のベランダにある色々な花たちを見ていた。
百合、薔薇、チューリップ、ネギなど自分が誇る花壇だ。
その亜紀の様子を見て、どやあ・・・どやあ・・・と思いつつ徐々に近づいていく。
「どうだ亜紀、俺のベランダは」
心の中でとても威張りながら聞く。
「うん、すごいよ・・・」
こちらの方には目をくれず答える。
そうだろうそうだろう、すごいだろう。
「芋虫がすごいよ・・・」
そうだろう、芋虫が・・・ん・・・？
なんか今聞きなれない単語が聞こえたような。
「えっ？虫いんの？」
「うん、ほら」
そう言って亜紀が指をさす。
その先には、ネギの所に芋虫が張り付いているのが見えた。
「うぎゃ」
思わぬ大きさに悲鳴を上げる。
「うぎゃ」
亜紀が俺の真似をしたため、ポコッと頭を軽く叩きベランダへと出る。
そして近くへと寄る。
・・・間近で見るとあれだな・・・
・・・芋虫だな・・・
これをどうするべきか。
ここで俺の資質が問われる。
もし、ここで俺が芋虫を手でぺぺーいと放り投げてしまえば、かっ

こいいだろう。
しかし、虫は大の苦手だ。
昔小学生の時、ランドセルから教科書を取り出したらゴキブリが出てきてトラウマになった。
あの時は思わず失禁しそうになった。
そのことを親に泣きながら話したら、漏らさなくてよかったねと言われ安心して失禁してすごく怒られたのを覚えている。
・・・懐かしいな、ははは・・・
こうやって過去に想いを馳せているのは目の前に居る芋虫という現実から逃げるためだ。
「しゅういちー、がんばれー」
部屋の中から亜紀が気の抜けた応援を送ってきている。
・・・そうだ。
いいところを見せねば。
ここで男を見せねばどこで見せるというのだ。
そう思って、目をつぶり親指の腹を芋虫へと近づけていく。
近づけていくにつれて、指に感じられる禍々しいオーラが徐々に強くなるのを感じた。
・・・大丈夫、怖くない怖くない。
芋虫なんてかわいいじゃないか。
まだら模様がついているし、ぷにっとしてるし、足はもさもさしてるし。
大丈夫、怖くない。
だが、自分がネギに親指をつけた瞬間ムニッとした感触が襲ってきた。
その時、俺の頭は少しおかしくなっていた。

そうだ。
この感触。

これは女の人のおっぱいだ。

このムニッとした感触。
これは俺が永遠に求めるであろう熟れた二つの果実なのだ。

そうだ、ついに俺は触ることができたんだ。
女の人のおっぱいに。

頭の中が混乱していたためか、自分はそんなことを考える。
そうだ、おっぱいだ。
そう思い目を開けた。
すると目の先には。

女性のおっぱいではなく、ムネムネとしながら指を登ろうとしてくる芋虫が居た。

その瞬間、自分の背筋が凍るのを感じた。
そして頭の中が真っ白になる。
「うきゃー！」
狂った猿のような叫び声を上げながら自分は回転して芋虫を振り払う。
この時の状況を亜紀にまじまじと見られていて死にたくなったのは後の話である。

回転していたらいつの間にか、指からおっぱ・・・じゃなくて芋虫の感触がなくなっていた。
それに気づき俺は回転するのをやめる。
そしてとある感情が自分の中に渦巻くのを感じていた。

勝った。

俺はトラウマという悪魔に勝ったのだ。
素手で触れたということはそう言ってもいい。
この時の自分は魔王を倒した勇者のような勝ち誇った感情に満ちあふれていた。

「しゅういちー」
亜紀の間の抜けた声が聞こえる。
何だ、庶民と思いながら振り返る。
すると亜紀がベッドの方を指さしていた。
その指の先を目でゆっくりと辿っていく。
その時、またもや背筋が凍るのを感じた。
なぜならば。

そこには、自分が外に放ったはずの芋虫がうねうねしていた。

「ぎゃあ」
俺はまたもや小さな叫び声を上げた。
「ぎゃあ」
亜紀は俺の真似して叫び声を上げてた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2342ba/

俺と少女の一日

2012年1月14日21時54分発行